文京学院大学人間学部研究紀要 Vol.11, No.1, pp.269 ～ 278, 2009.12

1 歳児のままごと遊びにみる幼児間のスクリプト共有過程

吉澤千夏＊・大瀧ミドリ＊＊

1 歳児のままごと遊びについて約半年間の観察記録の分析により，1 歳代から 2 歳代にかけての幼児のスクリプト共有過程を概観し，以下の結果を得た．

（1）1 歳代の幼児は，他児による「供する」を理解し，受け止めることが困難な場合があることが示唆される．しかし 2 歳を超えるころには，他児による「供する」行為に対する理解が深まることが示唆される．

（2）「切る」行為とそれにかかわる道具に関する知識は，2 歳を超えるころには共有されていることが示唆される．

（3）年齢的発達に伴い，共有されているスクリプトを構成しているスロット数が増加するとともに，メインスロットのみならず，「温度」「食物の確認」といったサブスロットをも含めた豊かなスクリプトが共有されていくことが明らかになる．

Key Words：スクリプト，スロット，ままごと遊び，1 歳児，共有過程

1．緒　　言

「食べる」ことは日々繰り返され，当たり前のように行われている行為であり，体験・経験を重ねることにより，「日常的に行われる活動の時系列的手順に関する知識（Schank & Abelson，1977）」を意味する概念であるスクリプトを獲得していくと考えられる．

スクリプトに関する研究はこれまで多数行われている．4 歳児は「食べる」ことにまつわるルーティン化された手続き（スクリプト）を獲得し，さらにそれを言語化できることが明らかにされており（Nelson 1978），5 歳から 8 歳の子どもはすでにスクリプトを獲得し，物語を想

＊人間学部児童発達学科

＊＊東京家政大学家政学部

起する際の言葉や出来事の数に発達的差異があることが示唆されている（McCartney & Nelson 1981）．また，4・5・6 歳児がスクリプトを獲得していることが確認され，1 日の生活時間は，構造化されていることが明らかにされている（無藤 1982）．さらに，年少者よりも年長者の方が，より多くの内容を想起することが明らかにされ，年齢的発達に伴いスクリプトが複雑化していくことが示唆されている（Hudson & Nelson 1983）．3 歳以前の幼児のスクリプトについては，1 歳前後に行為としてのスクリプトをすでに獲得し，3 歳を過ぎる頃にはスクリプトの言語化が可能であることが明らかにされている（Nelson 1985）．このことから，3 歳までの幼児のスクリプトを捉えるためには，言語ではなく行為によって捉えることが必要であると考えられる．そこで，母子のままごと遊びを分析対象とした研究によって，幼児のスクリプトの構造化過程とそれに関わる母親の役割が明らかにされている（吉澤等 2001，2002，2003 等）．

以上の研究結果は，幼児のスクリプトの有無や構造化過程を明らかにしたものである．しかし，食に関するスクリプトとは，食に関する共通概念を意味するものであり，その存在そのものに加えて，スクリプトが互いに共有されることで生活が円滑に営まれることに重要な意味がある．幼児期の子どもはスクリプトを獲得する過程にあり，それぞれが持つスクリプトには個人差，バリエーションが存在するため，必ずしもスクリプトが共有されているわけではない．多くの子どもたちは日常生活での体験・経験に加えて，集団保育の場でままごと遊びを行うことにより，互いが持つスクリプトを表出しあい，互いにそのスクリプトを共有していくことが考えられる．

ままごと遊びにおけるスクリプトの「共有」に関する研究は，その多くが，人間行動の階層化された上位目標であり，スクリプトの上位概念でもある「テーマ」や「プラン」に関するものである．また，スクリプトの「共有」についての研究としては，成人を対象に，レストラン・サービスにおけるスクリプトの有用性をアンケート調査によって明らかにしたものが挙げられるものの（藤村 2002），幼児のスクリプトの共有過程を明らかにしたものは見当たらない．そこで，スクリプトの共有過程を明らかにすることにより，食に関する共通概念が脈々と受け継がれてきた，その道程を示すことになる．

本研究は，「現実場面におけるのと文脈が異なるのみであって，行為そのものは，現実そのものの単純なコピーである（高橋 1993）」ままごと遊びにおいて，幼児がどのようなスクリプトを表出し，さらにそのスクリプトを理解し，受け入れ，互いの共通概念としていくかについて，その過程を捉えることを目的とし，3 年間にわたり幼児のままごと遊びの縦断観察を行っている．本報告では，研究開始時から約半年間のままごと遊びの様子について，事例をもとに分析を行い，1 歳代から 2 歳代にかけての幼児のスクリプト共有過程を概観することを目的としている．

2. 方　　法

(1) 研究対象

研究対象は，T 県 A 市内の保育所に通う幼児 11 名（男児 5 名，女児 6 名）である．観察時の幼児の月齢は表 1 に示すとおりである．

(2) 観察期間

2004 年 7 月から 12 月．本報告では，観察間隔をほぼ 2 ヶ月として観察に訪れ，撮影を行った際の映像を用いる．

表 1　観察時の対象児の月齢

	性別	1 回目	2 回目	3 回目	4 回目
A	男	2:3:0	2:5:8	2:7:6	2:8:20
B	女	2:2:13	2:4:22	2:6:20	2:8:3
C	男	2:2:10	2:4:19	2:6:17	2:8:0
D	男	2:1:2	2:3:10	2:5:8	2:6:22
E	女	1:11:23	2:2:1	2:3:30	2:5:23
F	女	1:11:21	2:1:30	2:3:28	2:5:21
G	男	1:10:10	2:0:19	2:2:17	2:4:0
H	女	1:10:7	2:0:16	2:2:14	2:3:27
I	女	1:9:19	1:11:28	2:1:26	2:3:9
J	男	1:8:3	1:10:13	2:0:10	2:1:23
K	女	1:8:2	1:10:12	2:0:9	2:1:22

(3) 観察の状況

映像は保育所内の匍匐室にて，ままごと遊びをしている幼児を正面から捉えられるように撮影を行う．使用するままごとセット（河合製）の 1 セットあたりの内容は，皿 2 種類（各 5），茶碗（5），カップ（5），湯飲み茶碗（5），フタ付きナベ 2 種類（各 1），フライパン（1），ポット（1），おたま（1），スプーン（5），フォーク（5），包丁（1），まな板（1），ガスコンロ（1），レンジ（1），テーブル（1），棚（1）となっている．皿や茶碗などの食器類は，棚に収納された状態で置かれ，包丁，また板，ガスコンロ，レンジはテーブルの上に置かれている．撮影にあたっては，幼児が匍匐室に入室してからままごと道具を片付けるまでを対象とする．

(4) 映像の処理

テープに収録された映像を，コンピュータに取り込み，1 分毎の動画ファイルに分割した後，分析に用いる．後に作成するプロトコルと併用して分析に用いることにより，対象児のやりとりを詳細に捉えることが可能となる．

(5) プロトコルの作成

上記で作成した動画ファイルを用いて，幼児同士のやりとり及び保育者の発話・行為を詳細に文字化する．文字化にあたっては，データの客観性を保証するために，2 名の記録者が映像の文字化を行い，一致しない場合には記録者間で再度確認の上，プロトコルを完成させる．

(6) 分析場面

2 名以上の幼児がままごと道具を介してかかわっている，またはままごとに関する発話や行為が行われている場面を分析対象とする．ただし，2 名以上の幼児によるままごと遊び場面に保育者がかかわっている場合も，分析場面に含める．

(7) 分析の方法

本研究は幼児同士のスクリプトの共有を問題としているため, スクリプトの抽出に関しては, ままごと遊びのストーリーを重視し，ストーリーの開始時点で表出されたスロットをスクリプトの起点とし，終了時点に表出されたスロットをスクリプトの終点とする．なお，本研究では幼児同士のやりとりにおける食に関するスクリプトの共有過程をスクリプトを構成する要素であるスロットの表出の様相から捉える．分析にあたっては，ままごと遊びを文脈的に捉え,「供する→食べる」「乾杯→飲む」のように，スロット同士の結びつきがスクリプト上，適切であると判断できる場合をスクリプトが共有されていると判断し，他者の行為を無視，気付かない，全く異なる文脈で受け止める等，ままごと遊びの流れに沿っていないと判断できる場合には，共有されていないと判断する．本研究では，吉澤等（2001，2007 等）において抽出された 38 項目からなるメインスロット，34 項目からなるサブスロットを用い，表出された全てのスロットを対象として分析を行う．

本報告は，1 歳児の食に関するスクリプトの共有過程を概観することを目的としているため，観察開始時に 1 歳代である幼児の観察を中心に分析を行う．

3. 結果及び考察

分析対象とした場面の継続時間は観察 1 が 54 分間，観察 2 が 49 分間，観察 3 が 61 分間，観察 4 が 54 分間である．1 回目の観察時に年齢が 1 歳代であるのは, 対象児 11 名中 7 名である．

各観察時において 2 名以上の幼児がかかわる場面は，観察 1 では 31 事例，観察 2 では 19 事例，観察 3 では 18 事例，観察 4 では 20 事例である．これらのうち，スクリプトが表出されない，ままごと道具がままごとに適した扱いをされていない場面，ままごと道具を取り合う場面，食に関する行為として認められない場面については，以後の分析からは除外する．2 名以上の幼児によるスクリプトの表出がみられるのは観察 1 では 6 事例，観察 2 では 2 事例，観察 3 では 3 事例，観察 4 では 8 事例である．

(1) 観察 1 における幼児のスクリプト

スクリプトが表出された 6 事例をみると，4 事例において幼児による「供する」をめぐるスクリプト，1 事例において「乾杯→飲む」スクリプト，1 事例において「道具の準備」を行うスクリプトが表出されている．幼児同士の「供する」をめぐるスクリプトは，4 事例において述べ 11 回出現し，そのうち 9 回は「供する」行為を相手が受けて「食べる」「飲む」を表出している．一方，2 回は「供する」行為の後，相手がそのことに気付かない，または反応がなされない（事例 1，事例 2）．

事例 1：C（2 歳 2 ヶ月 10 日）は，食器棚の横に移動をし，E（1 歳 11 ヶ月 23 日）にカップを渡そうとするが，E は気付かない．

事例 2：C は，保育者の真似をし，H（1 歳 10 ヶ月 7 日）にフォークを差し出すが反応がない．

2 歳 0 ヶ月時の幼児は「食べる」「飲む」に加えて，調理や供応に関するスロットの表出がみられ，約半数の幼児は「供する」スロットの表出が可能であることが明らかになっている（吉澤等 2002）．このことから，C 児は「供する」を表出することが可能であることが明らかとなる．一方，E 児，H 児は 2 歳未満児である．1 歳 0 ヶ月時の幼児の表出スロットの中心は「食べる」「飲む」であり，年齢的発達に伴い「供する」等のスロットの表出が可能となる（吉澤等 2001）．そのため，E 児，H 児は C 児の「供する」を理解し，その行為を適切に受け止めることが容易ではなく，差し出されたカップを受け取り「飲む」行為を行ったり，フォークを手に取り「食べる」行為を行うことが困難になる場合があることが示唆される．

(2) 観察 2 における幼児のスクリプト

スクリプトが表出された 2 事例をみると，2 事例とも「道具の準備」にかかわるスクリプトが表出されている．このうち，1 事例は「道具の準備」のみの表出であり，もう 1 事例は「切る」行為に対して，まな板を差し出す「道具の準備」を行うスクリプトである（事例 3）．

事例 3：C（2 歳 4 ヶ月 19 日）は，フォークと包丁をクロスに置き，包丁で床を「とんとん」と切る．

C は，先程床に置いた皿をテーブルに置き，包丁が逆さまな状態で皿の上で「とんとん」と切る．

G（2 歳 0 ヶ月 19 日）は，テーブルにまな板を置く．

C は，テーブルを自分の方へ引く．

C は，皿の上に包丁を縦に置く．

2 歳 0 ヶ月時の幼児の約半数は「切る」を表出することが可能である（吉澤等 2002）ことから，

C児は「切る」ための道具として包丁を理解しているが故に包丁を用いて「切る」行為を行っていることが示唆される．また，G児はC児の行為を「切る」と理解し，さらに「切る」ためにまな板が必要な道具であることを理解しているが故に，まな板をC児が使用しているテーブル上に置いたと考えられる．また，G児がテーブルにまな板を置いたことに対して，C児はそのテーブルを手元に引き寄せている．その後に「切る」を行わないものの，G児の行為が自らの「切る」に対して行われたものであることを理解していることが示唆される．このことから，C児とG児の間で，「切る」行為とそれにかかわる道具に関する知識が共有されていることが明らかになる．

(3) 観察3における幼児のスクリプト

スクリプトが表出された3事例をみると，2事例において幼児による「供する」をめぐるスクリプト，1事例において「材料をナベ等に入れる」が表出されている．幼児同士の「供する」をめぐるスクリプトは，2事例において述べ2回出現し，そのうち1回は「供する」行為を行い，相手はそれを受けてカップを受け取っている．もう1回は，「供する」行為の後，相手である幼児はそれを拒否している（事例4）．

事例4：B（2歳6ヶ月20日）は，保育者Aの所へ来て，カップを渡す．
保育者Aは，カップを受け取る．
C（2歳6ヶ月17日）は，保育者Aが持っているカップを取り，立ち上がる．
Cは，手に持っているカップで，Bの持っているポットに入れ替える．
Bは，ポットのフタを開ける．
Cは，カップをテーブルに置く．
Bは，フタをし，ゆっくりとCのカップに注ぐ．
Cは，テーブルにある湯呑を手に取り，G（2歳2ヶ月17日）に差し出す．
Gは，「いらないよ」という．
Cは，テーブルにあるカップを手に取り，Gに差し出す．
Gは，無視，反応しない．
Cは，カップをテーブルに置く．

この事例4をさらに詳しくみてみると，まずB児がカップを保育者に「供する」と，保育者はそれを受け取る．そのカップをC児が手に取り，B児が手に持つポットに移し替え「飲物の準備」を行うと，それに伴いB児はポットに飲物を入れやすくするためにポットのフタを開けている．C児は手に持つカップをテーブル上に置くと，B児はポットに「フタをのせる」行為を行った後，C児がテーブルに置いたカップにポットから「注ぐ」．C児はそのカップを手に取り，「供する」と，G児に「いらないよ」を言われ，さらに無視をされる．ここで

は, 飲むに関する「（保育者に）供する→飲物の準備→フタをのせる→注ぐ→供する→（拒否）」スクリプトがB児，C児，G児によって表出されている．この「飲む」に関するスクリプトは，B児から保育者に対してカップを「供する」行為が行われた後，C児はそのカップに飲物を入れるために，B児の持っているポットに飲物を入れるところから開始している（「飲物の準備」）．それに対し，B児はポットのフタをはずし，さらに「フタをのせる」という，C児の「飲物の準備」を受け入れるための細やかなふり行為を行っている．さらに, B児はC児がテーブルに置いたカップに再び「注ぐ」行為を表出し, そのカップをC児がG児に対して「供する」ことから，B児とC児の間で飲むための準備や供応に関するスクリプトが共有されていると考えられる．

さらに，C児が「供する」行為を行ったことに対して，G児が「いらないよ」「無視，反応しない」点については，事例1，事例2における「気付かない，または反応がなされない」とは異なる反応であると言える．先に述べたように，事例1，事例2においてE児，H児は，C児が「供する」行為を表出した意味を十分に理解できなかったため, それを受けて「食べる」「飲む」を表出しなかったと考えられる．しかし，飲むに関する「供する」を表出する2歳0ヶ月児は60％を超えている（吉澤等2002）ことから，事例4においてC児が供したことに対してG児が「いらないよ」と発話したことは，C児が飲物を供していることを理解した上で，それをいらないと表明していることが示唆される．また，このスクリプトを構成しているスロット数は5であり，複数のスロットを組み合わせた複雑なスクリプトが幼児間で共有されつつあることが明らかになる．

（4）観察4における幼児のスクリプト

スクリプトが表出された8事例をみると，4事例においては「乾杯」をする，「道具の準備」をする等，1種類のスロットを複数の幼児が繰り返すことによってスクリプトが構成されている．その他の4事例では3つ以上のスロットによって構成されるスクリプトが表出されている．3つ以上のスロットで構成されているスクリプトは，4事例において述べ4回表出され，構成しているスロット数は，最も多いものが12であり，最も少ないものは3である．

事例５：C（２歳８ヶ月０日）は，保育者Aに，皿と皿にのったスプーンを差し出し「あっちい」という．
保育者Aは，「何？あっちいの？」といいながら，手に取る．
保育者Aは，保育者Aを囲んでいる子どもたちに「あっちいって，なんだろうね？」と問いかける．
E（２歳５ヶ月23日）は, 保育者Aが持っている皿を手に取り, 食べるふりをする．
保育者Aは，「あっちいから，フーフーして食べなくちゃね」という．
Eは，保育者Aに返す．

保育者Aは，皿の上でスプーンを何回かかき出すようにする．
Cは，皿とスプーンを取る．
D（2歳6ヶ月22日）は，「カレーだ」という．
Cは，真似をして「カレーだ」と言い，保育者Aの口元に運ぶ．
保育者Aは，食べるふりをし，「おいしいね」と言う．
Cは，テーブルに戻り，I（2歳3ヶ月9日）が持っている皿の上から移す．
Cは，保育者Aの所へ行き，皿の上にスプーンを置き，差し出す．

構成するスロット数が最も多いスクリプト（事例5）に注目すると，まずC児が保育者に対して「あっちい」と食物の「温度」について言及しながら，スプーンののった皿を「供する」と，保育者も「温度」に触れながら供されたスプーンののった皿を受け取る．それを見ていたE児は保育者の持つスプーンで皿から食べると，保育者は再び「あっちいから，フーフーして食べなくちゃね」と言って再度，食物の温度に言及し，さらにスプーンで皿をかき混ぜる．すると，C児は保育者の持つ皿とスプーンを取る．その後，D児が「カレーだ」と言って，皿の上にある「食物の確認」をし，それにC児も同調しつつ，保育者にスプーンを使って「供する」．保育者はC児に供されたカレーを「食べる」行為を表出した後，「おいしいという」と，C児はI児の皿から「盛り付け」を行い，再度，保育者に「供する」行為を表出している．ここでは，「供する→温度→〔温度〕→食べる→〔温度→混ぜる2〕→食物の確認→供する→〔食べる→おいしいという〕→盛り付け→供する（〔〕内は保育者による表出スロット）」スクリプトがC児，D児，E児，I児，保育者によって表出されている．

保育者によって5つのスロットが表出されているものの，4名の幼児が7つのスロットを表出してスクリプトを構成しており，2ヶ月前（観察3）よりもさらに複雑なスクリプトを共有していることが明らかになる．また，C児から保育者に供された皿とスプーンをE児が食べるふりをしていることから，C児から保育者への食具の受け渡しをE児が「供する」行為と理解し，その皿に食物があると想定し，「食べる」を表出したと考えられる．また，幼児によって表出されているスロットは食べるに関するメインスロット「盛り付け」「供する」「食べる」，サブスロット「食物の確認」「温度」である．すでに2歳6ヶ月以上となっているC児とD児は「食べる」や食べるための供応に関するスロットを共有するとともに，食物そのものの名称や状態に言及し，より豊かな「食べる」に関するスクリプトを共有していることが示唆される．

4. おわりに

4回の観察において，1歳代の幼児は，他児による「供する」を理解することが困難な場合もあり，その行為を受けて「食べる」「飲む」の表出がなされないこともある．しかし，発達に伴い，相手の行為を理解し，その行為に必要な道具を準備したり，複数のスロットを繋ぎな

がらままごと遊びを展開するようになっていくことが示唆される．さらに，「食べる」「飲む」ための手順だけでなく，食物の名称や状態などに言及するスロットを表出する等，より複雑で豊かなスクリプトを共有するようになると考えられる．

発達過程にある幼児は, 獲得しているスロットの種類の少なさやスロットの表出方法（表現）が十分に熟達していないことが要因となり，他児の理解が得られないこともある．しかし，日常生活やままごと遊びを通した体験･経験や知識の増加に伴い，スロットの表出方法が熟達し，他児の表出スロットへの理解を深めることにより，幼児間のスクリプトの共有化が図られると考えられる．

今後は，2 歳代以降のスクリプトの共有過程について事例を通して検討するとともに，スクリプト獲得期である 1 歳代から 3 歳代までの幼児のままごと遊びのスクリプト共有過程について統計的に分析する必要がある．

本報告は，科学研究費補助金（若手研究（B）：課題番号 19700566）の助成を受けて行われたものである．本研究の遂行にあたり，園での子どもたちのままごと遊びを観察する機会を与えて下さったわかば保育園園長須藤悦子先生，保育士の皆様，そして園児のみなさまに心より感謝申し上げる．またプロトコルの作成にあたって甚大なご協力をいただいた文京学院大学人間学部児童発達学科 4 年 加藤智子さん，上河内菜美さんに謝意を表する．

引用文献

藤村和広　(2002). レストラン・サービスにおけるスクリプトの共有が顧客満足に及ぼす影響に関する実証分析　香川大学經濟論叢，75(1),111-140.

Hudson, J., & Nelson, K. (1983). Effects of script structure on children' s story recall. *Developmental Psychology, 19*, 625-635.

McCartney, K. A., & Nelson, K. (1981). Children' s use of scripts in story recall. *Discourse Processes,* 4, 59-70.

無藤隆 (1982). 幼児における生活時間の構造　教育心理学研究，30(3)，185-191.

Nelson, K. (1978). How children represent their world in and out of language. In R. S. Siegler (Ed.) *Children's thinking: What develops?* Hillsdale, NJ: LEA. 255-273.

Nelson, K. (1985). *Making sense: The acquisition of shared meaning.* Orlando; Florida: Academic Press.

Schank, R. C., & Abelson, R. P. (1977). *Scripts, plans, goals and understanding: An inquiry into human knowledge structures.* Hillsdale, NJ: LEA.　36-68.

高橋たまき (1993). 『子どものふり遊びの世界―現実世界と想像世界の発達』 ブレーン出版，東京，47-93.

吉澤千夏・大瀧ミドリ・松村京子 (2001). 1 歳児のままごと遊びにおける食に関するスクリプトについて　日本家政学会誌，52(2)，147-153.

吉澤千夏・大瀧ミドリ・松村京子 (2002). 2 歳児のままごと遊びにおける食に関するスクリプトについ

て　日本家政学会誌，53(6)，539-548.

吉澤千夏・大瀧ミドリ・松村京子 (2003). 3 歳児のままごと遊びにおける食に関するスクリプトについて　日本家政学会誌，54(2)，113-122.

吉澤千夏・大瀧ミドリ (2007). ままごと遊びにみる食のスロット表出における 1 歳児と母親の関連．足利短期大学紀要，27(1)，33-40.

吉澤千夏・大瀧ミドリ (2008a). ままごと遊びにみる食のスロット表出における 2 歳児と母親の関連　足利短期大学紀要，28(1)，35-44.

吉澤千夏・大瀧ミドリ (2008b). ままごと遊びにみる食のスロット表出における 3 歳児と母親の関連　足利短期大学紀要，28(1)，45-54.

（2009.10.5 受稿，2009.11.9 受理）